

豊田鋸加工所

目立て用設備の導入と培った技術で新分野への進出と既存分野の強化

売上高、バブル期がピーク



豊田市内唯一の帯鋸や丸鋸の「目立て」工場

の海外移管の進行だ。だからと言って職人気質ならではの姿勢で営業活動にも積極的ではなかった。改革を目指し補助金を活用した新たな事業に乗り出したのが、平成29年から実父山本孝宏氏と共同で代表を務める雄介氏だ。

豊田鋸加工所は昭和39年の創業以来、切れ味の鈍くなった工業用刃物の再研磨や、帯鋸・丸鋸の刃を付け替えたり鋭くしたりする「目立て」業を営んできた。受け入れる刃物の種類は多岐にわたる上、木材や樹脂、紙類などさまざまな業種の顧客との取引実績がある。豊田市唯一の再研磨事業者として、地元のみならず100km圏内であれば集荷と配達にも応じている。高価な刃物を研磨して再利用するメリットは大きく、一見すると安定した事業のように見える。だが売り上げは30年前のバブル期をピークに微減傾向が続いていたという。原因は受注の大半を占めていた木材加工

地の利を活かすための決断

雄介氏が検討したのは「豊田市という地の利を活かすこと」だ。実は同社は木材用刃物を中心に手がけ、鉄鋼用刃物はほとんど受けていなかった。自動車産業の中心地として本来鉄鋼用の刃物の消費量は大きいはずだ。特に部品加工の前段階で材料を切り分けるために必要な丸鋸の再研磨には底堅い需要が見込める。

同時に受注が減少し続けていた木材業界にも変化が起きていた。国産材の利活用を進める国の林業振興策に歩調を合わせ、豊田市が大規模製材工場を誘致したのだ。製材工場では長尺材の加工に適した帯鋸を多く使用するため、市内唯一の再研磨業者として目立ての依頼に応えることができないか。そこで同30年には「平成29年度補正ものづくり・商業・サービス経営力向上支援補助金」を活用し丸鋸用の研磨機と帯鋸の刃先の自動溶着機を一挙に導入した。



刃先の両側面を一度に研削する

高精度、自動化を実現

刃先の研磨や付け替えそのものは「長年の経験と既存の設備で対応できる」（山本雄介代表）。新しい設備が実現したのは生産性向上や高精度への対応だ。丸鋸用の研磨機は口ウ付けした丸鋸の刃先の両側面



生産効率が向上した帯鋸の溶着機

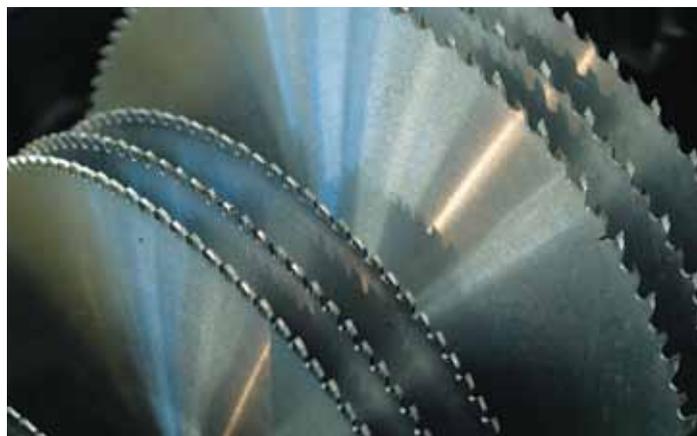
を一度に研磨できるため、従来機のように片面ずつ段取りする必要がなくなった。その上、木工用よりも高い鉄鋼用の精度の要求にも応えられる。帯鋸の溶着機は手作業だった工程を自動化し、従来は「できて1日1本」（同）だったという帯鋸の再生を1日3本以上受注できるようになった。

狙いは当たり、鉄鋼用丸鋸の引き合いは徐々に伸び始めている。市内の製材工場には「毎日通い」（同）、帯鋸の自動溶着機も着実に稼働しているという。従業員も5人から7人に増員した。両設備導入当初に掲げた「5年後の令和5年に1.5倍」という売り上げ目標も射程圏内に捉えている。

技術で地域に貢献

順調に推移する状況にあるものの、雄介氏は気を引き締める。最近では地元だけではなく、全国から依頼が寄せられるという。自社の技術の評価が高まっているからだが、一方で全国的に再研磨業者の廃業が相次いでいるという現実がある。モノづくりに刃物の再研磨は欠かせない。コスト面だけではなく、環境面での利点も大きい。大切な技術を継承していくため、今こそ積極的に情報を発信していくべきだと決意している。取り組みが認められ、令和2年度には地元の中小・零細企業を顕彰する「豊田ものづくりブランド」に、再研磨技術として認定を受けた。社内の士気向上にも役立っているという。

長期的には別工程の自動化や工場拡張も見据える。自社を育ててくれた地域への恩返しに、子供たちの健全な育成を支援するという壮大な構想もある。導入した二つの設備の活躍で、夢をかなえる基盤が整いつつある。



再研磨技術で「豊田ものづくりブランド」に認定された

企業データ

企業名	豊田鋸加工所(とよたのこかこうしょ)
代表者役職名・氏名	代表者 山本孝宏
設立年月日	昭和39年1月1日
住所	〒470-0341 愛知県豊田市上原町西山593番地1 (工場 豊田市上原町西山593番地5)
電話	0565-45-0524
FAX	0565-45-0592
URL	https://www.toyotanoko.com/
E-Mail	toyonoko@hm8.aitai.ne.jp
資本金	(個人事業主)
業種	機械刃物の再研磨・目立て
従業員数	7人



地の利を生かしたいと語る
山本雄介共同代表